



十和田市立中央病院

病院ニュース

さわらび

令和6年新春号



新年の挨拶



写真：第49回日本診療
情報管理学会学術大会
in 青森(2023.9.14-15)にて

人口減少と病院運営

十和田市立中央病院
病院事業管理者

たんのひろあき
丹野 弘晃

明けましておめでとうございます。市民の皆さんへの講演のネタとして、十和田市の人口について調べていたところ、令和4年3月31日時点と令和5年3月31日時点の65歳以上の人口データが、20,473人と全く同数であることに気が付きました。十和田市の人口は毎年約1%、600人前後減少しており、その中で高齢者はこれまで毎年400人前後増加していたのですが、ここに来て横ばいとなったということです。これはつまり、働き盛り世代の急減が始まっているということに他なりません。全国的には2025年以降、「高齢者の急増」から「現役世代の急減」に局面が変化するとの指摘がありますが、十和田市は既にその時期を迎えていると実感したところです。

このような状況の中、病院運営は厳しさを増していると言わざるを得ません。人口動向から容易に想定されるように、医療界でも人材不足が顕著です。医師は微増しつつありますが診療科偏在が明らかですし、薬剤師・看護師等のすべてのメディカルスタッフ、そして医療に精通した事務職員も含めて不足しております。また、医師の働き方改革が、どのように地域医療提供体制や病院経営へ影響するのかについては未知数ですし、アフターコロナ時代の患者数減少傾向は日常化してきており、その対策も必要です。

新年早々ネガティブなお話でなかなか妙案はないのですが、当院としては病床数をダウンサイズし、少なくとも現有職員数を維持しながら、より急性期医療へシフトしたいと考えています。当地域の救急医療・がん医療・精神科医療等をしっかり担いながら、回復期・慢性期の患者さんの受け皿として在宅専門の附属とわだ診療所をさらに充実させていきたいと思ひます。そして、地域医療連携推進法人「上十三まるごとネット」を活用して、入院の必要な回復期・慢性期の患者さんには、地域全体で対応していくことが重要であろうと思ひます。

人口減少が進行し、サービス業を中心に地方からの撤退戦と表現される状況の中、医療は地域のインフラであり、戦略的に縮みながらも存立し続けなければなりません。機能分化・連携強化に尽きる訳ですが、地域全体を見渡す鳥の目の重要性が増しているのではないかと思ひます。医療DXの流れの中で、闇雲にデジタル化に走るのではなく、地域全体がトランスフォームできるような処方方を皆さんと考えて行きたいと思ひます。本年もよろしくお願ひいたします。

